



公益財団法人都市活力研究所

アーバン・イノベーション・セミナー 講演録

東京2020と都市計画のこれから

主催：公益財団法人 都市活力研究所

後援：一般財団法人 都市みらい推進機構

日時：2014年6月27日（金） 午後3時～5時30分

場所：ナレッジキャピタル カンファレンスルーム

— プログラム —

15:00	あいさつ 立命館大学 総合科学技術研究機構 上席研究員	村橋 正武 氏
15:10	講演「東京2020と都市計画のこれから」 日本大学 理工学部 土木工学科 教授	岸井 隆幸 氏
16:30	休憩	
16:40	ディスカッション 日本大学 理工学部 土木工学科 教授 コメンテーター 関西学院大学 総合政策学部 教授	岸井 隆幸 氏 角野 幸博 氏
	司会 公益財団法人都市活力研究所 主席研究員	坂田 清三
17:30	閉会	

村橋先生 あいさつ

皆さんよくご存知とは思いますが、岸井先生は今や我が国の都市計画、都市開発の第一人者と言えます。実務と研究・理論の両方を兼ね備え、実務がわかっている都市計画、まちづくりの話ができる、具体的な計画のリーダーシップを発揮できる方です。今日はじっくりお話をおうかがいしたいと思います。

いま気になっているのは、日本の都市計画、まちづくりがどうも東京を中心に物事が動いていることです。全国の都市、関西の大阪、京都、神戸はいろいろな姿を持ってそれぞれの取り組みも行っている。そのことが国に浸透していかない。東京ローカルの話だけではなく、後半では都市計画のこれからの動きなど視野の広い議論をお願いしたい。

岸井先生 講演

<2020東京大会の概要と課題>

本日は2020年のオリンピック、さらにその先に向けた東京の動きの紹介と国も含めて都市計画がどういう方向に向かおうとしているかについてお話をさせていただきます。

オリンピックについてはIOCへのプレゼンなどに関わってきました。今回の東京オリンピックのテーマはDiscover Tomorrowとなっています。一番評価されたのはDelivery、安心・確実な大会運営ということだと思います。8km以内に競技会場があつてヘリテッジも活用します。引き続きパラリンピックが開催されて様々な方が日本に来ます。パラリンピックの方が大事なのではと言う人もいます。

プランは国立競技場などのヘリテッジ・ゾーン、バイエリア・ゾーンがあつて真ん中に選手村がある。オリンピックではメイン・スタジアム、選手村、メディア・センターの3つがうまく配置されていることが大事。新木場の周辺に新設の施設が多くできる。組織委員会が設立されて基本計画を詰めており、来年2月にはIOCに提出しないとイケない。1年前にテスト・イベントを行うのでそれまでに大体の施設が完成していることが望ましい。国立競技場は2019年にラグビーのW杯が開かれ、それまでに完成させるということであり時間はない。1964年のオリンピックでも5年間で様々な施設をつくったが、今回は新しい施設を追加すると言うよりは既存の施設を使いながらより成熟した日本の姿を見てもらうという方向に進むと思う。

国立競技場の建て替えは昨年デザイン・コンペをやつてザッハのプランを選んだ。その後、25%小さくして基本設計を発表した。シンボリックな形。景観もチェックしている。規模が小さくなって横浜の日産スタジアムと同じぐらい。ロンドンには8万人規模のものが2つあるが東京にはない。

これから課題になるのが晴海の選手村、2016年に立候補したときはメイン会場だったが、実は交通機関があまりない。期間中の選手の移動は首都高のオリンピック・レーンを使うのでいいが、その後、住宅として使うとき問題になる。バイエリアの競技場にお客さんをどう運ぶかという交通インフラも課題である。

さらに2020年の開催だけではなくその先に都市の新しい力にどうつなげていくかという議論もしている。1つはアジアのスポーツ・ビジネスの拠点ができればいいと思っている。アジアの所得水準も伸びていてスポーツ・文化の支出も増えるが、実は様々なスポーツのアジアの連盟の拠点は日本にはない。もう1つは、日本は高齢社会を迎えているがスポーツを使って次の時代に必要なことが得られるのではないかということです。健康が大事なキーワード、健康のためにはまず動くこと、競技場を我々が使うという視点が必要である。オリンピックのボランティアで参加し施設に愛着を持ち、その後は意欲を持って自分達で使う。健康で健やかに生きて長生きする。パラリンピックにも関係するが、それが新しい産業につながる。アジアの高齢化へのソリューションになるということを考えるべきである。

＜2020大会と東京のまちづくり＞

新幹線、首都高、モノレール、いずれも60年代にオリンピックのときに出来た。現在の都市基盤はそのときに出来ており50年を経過している。それを見直すいい契機である。また、東京、日本は既にアジアの各都市に追い越されている。アジアのGDPに占める日本の割合は2012年で24.5%に落ちてきている。アジアの拠点はシンガポール、香港、英語圏と中国語圏が交わる場所。このままでいいかどうか。国際会議の開催件数もシンガポールが大きく伸びている。そういう中でオリンピックが開催されることは日本の良さ、力をアピールするいい機会になる。1964年の東京大会に比べて2012年のロンドン大会は参加国、選手数が倍、多くの人々が日本を訪れる。

ここ2、3年で3環状（中央環状線、外環道、圏央道）がほぼでき上がる。そうすると都心の首都高、都心環状線は流れが大きく変わる。オリンピックのときはオリンピック・レーンにする。半分ぐらいにしてみても何が起きるかが判ることになる。これからの首都高速のあり方を考えるいい機会になる。

これも偶々であるが2015年は国の交通政策審議会の目標年次で、2000年に首都圏の鉄道網を描いていてその目標年次に当たる。当時考えた早期に完成すべき路線は大半完成した。羽田空港の国際化、中央リニア新幹線の計画決定などを踏まえて今年、議論をして来年には新しい鉄道網のあり方を提案していくことになる。ちょうど高速道路、鉄道のインフラを見直す時期に重なったということになる。

＜その先の都市整備＞

2020年は通過点であり、その先の都市整備を考えないといけない。2019年は都市計画法100周年、2020年はオリンピック・パラリンピック。あまり話題になりませんが2020年は実は大阪万博50年です。2023年は近代公園150周年、関東大震災100年、2027年はリニア新幹線が名古屋まで開業する。

2020年にオリンピックとなると、普通3～5年先までしか考えない民間企業にとってはちょっと先だが、7年後に何をするか考えないといけない。行政は20年後を考えるが7年後までに何が出来るかを考えないといけない。目標感として7年後というのは微妙なタイミングで面白い。そこから7年後にリニアがある。2034年はサッカーW杯に立候補出来る。大阪で見ると御堂筋100年が2037年。大阪までのリニアはいまの計画では2045年、終戦から100年の年になる。

目標感を皆が持つのは大事である。東京がさらに先に目指すべきは「戦える都市」すなわち都市間競争に勝つような効率、安全、「魅了する都市」すなわち住みたい、憧れの街とと思うような文化、環境と考える。クール・ジャパンと言われるような憧れがあるうちに日本の都市の力を再評価させることが必要である。

東京では東北からの鉄道のラインが東海道につながり、南北に西回り・東回りそれぞれ二重の軸ができる。東京の南には横浜、北にはさいたまがあり、東京のバックアップを国際的なものは横浜、国内的なものはさいたまということも考えられる。西の多摩には山が

あり、東の千葉には海がある、こういう魅力をもっと訴えていくべきである。

都心では大手町、丸の内が大きく変わった。1988年にやり出してから30年、連鎖型の区画整理、再開発で業務を止めないようにしながらビルが建て替わった。丸の内のあと1970年ころから出来てきた業務都心が新宿、そろそろ更新しないといけない。そう思っているところに先日、虎の門ヒルズが完成した。業務拠点が丸の内、新宿、六本木・虎の門・汐留に30年おきに出来た。丸の内は30年かけて更新をした、次は新宿が30年かけて更新する、さらに60年後は六本木・虎の門・汐留を更新する。東京の都心は3つあることで3分の2を維持しながら常に時代に合うように更新できるというシステムが出来上がった。シンガポール、香港にない奥の深さになる。

リニアが出来ると品川と名古屋が40分でつながり名古屋空港は東京の第3空港とも言えるようになる。1都3県の人口が3500万人、シンガポールは500万人。リニアが出来ると1時間半の圏域の人口は4700万人、韓国の人口は4800万人。大阪までつながると6500万人、イギリス、フランスの人口は6200万人。これだけの巨大な都市圏は世界にない。いまでも東京の都市圏は世界最高の規模、そこに質の高い消費者がいる。それがさらに増えていく。これはアジアをにらんでいいテスト市場になる。ということで品川は大化けするのではないかと思う。

渋谷も動いている。2020年には東棟のタワーができる。浜松町、築地、有楽町・日比谷など東京はまだまだ動いている。代々木のNHKの建て替えの話もある。国立競技場の周辺もある。中央環状が出来ると日本橋の首都高を埋めて日本橋川がよみがえるかも知れない。スカイツリーが出来たがその次に浅草駅周辺の話もある。東京はいろいろある。

<都市計画のこれから>

社会資本整備審議会都市計画部会に「都市マネジメント」のあり方が諮問されました。「都市空間の整備、管理運営の最適化により都市の機能を高めていく」ということを考える。施設をつくるだけではなく管理運営をうまくする。その背景には都市政策の手法の変化がある。高度成長期、人口増加への対応は都市施設の整備、土地利用規制だったが、その後、都市の質の向上が求められるようになりそれに対する支援も行われるようになった。さらに人口減少への対応となり都市をうまく折りたたんでいかないといけない、都市機能、居住機能の誘導が必要ということで都市再生特別措置法の改正が行われた。居住を誘導する地域、機能を誘導する地域を決めてそこに来るものは支援をする。悪く言えば第2線引き、第1線引きは外側のコントロール、第2線引きはそこにぜひ集めたいということを明示して支援したり場合によってはコントロールしたりする。高齢社会の中でこれをどう実現していくか各自治体が考える。第1線引きもかなりもめたが第2線引きはもっともめるかも知れない。国としてはそれを進める自治体を支援していこうということである。

さらに都市のマネジメントを考えるということになって議論を始めたところである。1つはエリアマネジメント、民間主体によるまちづくりで、既にいろいろな取り組みが行われているが課題もいろいろある。2つ目は都市の施設、インフラ。公的不動産も含めて更

新をしていく、その際には管理も考える、病院・学校のあり方、民間による整備などを検討する。3つ目の市街地整備については大街区化、再再開発、防災・減災などについて議論していく。駐車場、地下街、エネルギーなど既に検討してきている個別テーマもうまく合わせて27年度までに全体像を整理する。課題は認識しているが答えはない状態、皆さんからこういうことをやるべきだという提案を是非いただきたい。

今後の都市計画として大事なことは、モノをつくることから「持続可能性」を軸に考えていく、自治体が公共施設をつくることから自治体間、公民の「協働」の仕組みを考えていく、そしてそろそろ「日本ならではの」都市空間を目指すということだと考えている。地震も課題であり、高齢者は大都市圏で増えるということもある。2年前から都市再構築戦略検討委員会をやって特措法の改正に結びついた。同じく2年前から健康・医療・福祉のまちづくり研究会もやっていてガイドラインを出そうと考えている。

具体的にはどうするか。地方都市の中心市街地で大規模店舗が撤退、跡が駐車場になって、96年に行ったときは自販機が並んでいた。目抜き通りにあり、これは深刻、まずいだと思ったが、2004年に行くとおばあちゃんが小屋を出して近在のものを売っていた。この方がはるかにいい、こういうことを考えていかないといけない。また、合理的なまちを求めていくと車社会で都心は高層ビル、周りは駐車場の海になる。いま地方都市の都心部の2~3割は駐車場である。それよりは人の海の方がいい。どうすれば人を集められるかを考えないといけない。周りの空間も何とかしないとというのがエリアマネジメントで皆さんも取り組んでおられる。

こういうことを支えるのが「労働から働楽（どうらく）へ」、高齢者が楽しく働く社会を自らつくることである。「金銭消費から時間貯蓄へ」、金を使うことよりも大切な時間をしっかり貯めて使うことである。このためにはいろいろな仕掛けがある。都市計画はハードな空間をつくるだけでは終わらなくなっている。

東京の都市再生の公共貢献提案としては国際会議場、ホテル、産業支援、文化交流、観光、コミュニティなどいろいろなものがある。運営する人がそこにおいて場所が決まってくるもの、民間の活動をいかにまちづくりにつなげるかということ志向せざるを得ないということの表れである。

<関西は何処に？>

関西はどうか？まずは2020年の東京大会をどう使うかを考えていただきたい。大阪万博50年にも当たる。オリンピックはスポーツだけではなく文化イベントも数年前から全国でやることになっている。外国人もたくさん訪れる、京都だけではなく大阪も行ってみたいと思わせることが大事である。2019年までに大阪で新しいものをつくって日本に来た外国人にあれを見にいかないとと思わせる。食い倒れもどうか。どうするか、関西連合でいくべきだと思う。

オリンピックはこれまでの各都市をみても開催が決まったらそのときから観光客が増える。観光白書によると外国人観光客のヨーロッパ系は東京のあと京都に泊まる。中国・韓

国・アジア系は東京のあと大阪に来ている。またツアーで来る人が多いが、これからは団体ではなく個人で来るようになる。その場合、いま団体客中心の大阪はどうするか。日本へ来た外国人はまた来たいという人が多い、それをどううまくつかまえるか。

英語のガイドブックを見ると東京で一番出ているのは渋谷のハチ公広場である。Lonely Planet に東京、京都は出ているが大阪は出していない。探してみると Patrick Mackey の Osaka Insider という本があった。「京都、奈良、姫路に近い、大きな商業都市だが他には何も無い」と書いてある。これではだめ、京都、奈良、姫路、どこに行くにも近くて便利ということが多言語の SNS で意図的に流すという地道な努力も大事なのではないか。

2001年から2006年のデータになるが東京で従業者が増えているのは港区と渋谷区。その中で情報通信業の伸びが著しい、渋谷ビットバレーから六本木に入居という流れ。東京は成長していった情報通信業をつかまえている。総人口、全産業でみると関西は関東の5割だが、情報産業の事業所、従業員数では2、3割と差が出ている。時代の成長産業をつかまえることが大事である。ここ20年ぐらいの東京の開発をみると入っているのは全部TV局、情報産業、デジタル化もあった。大阪市大の小長谷先生によると大阪は地上波放送局がない、情報産業に払う対価が小さい、情報系・芸術系の専門学校は多いがみんな東京へ行ってしまおうという話だった。船場デジタルタウン構想があったがその後、展開していないようである。もう一段の努力を期待したい。

次の時代の産業は何かも考えないといけない。医療・健康で特区を進めておられるのは正しいと思う。次の時代のニーズは何か、それに適合したものをつかまえて、皆で「次につなぐ」という心意気をもう一段強くして、「達成感」の仕組みも必要ではないかと思う。

衛星写真の遠景で見るとシンガポール、香港に比べて東京、関西大きく、関西は東京に比べて自然も近い。大阪、神戸、京都、奈良と多様性に富んでいてしかも自然に近い魅力的な地域である。しかし、ぐっとアップにして見ると東京、パリに比べて大阪の都心は自然が少ない。外国の都市にはフランクフルトのツァイル通り、パリのシャンゼリゼ通りのような緑の美しい大通りがある。御堂筋100年も来る、そこに大胆に大阪の魅力を表現できないか。2037年を考えれば出来ないことではない。次の世代に何を残していくか考えてみてもいいと思う。「夢なくして理想なし、理想なくして計画なし、計画なくして実行なし、実行なくして成功なし、しこうして、夢なくして成功なし」、吉田松陰の言葉です。

関西は世界的にみて多様性がある。その中心に大阪がある。大阪の都心、まちが東京と同じであっては困る。関西の多様性を世界にアピールする、そのことを加速するためには真ん中にある大阪を思い切って魅力的にしないといけない。水かも知れないし御堂筋かも知れない、それを20年、30年かけて実現していただきたい。北ヤード2期もその一つ、ナレッジキャピタルに若い人も集まってきている。そこにとんがったものがあつた方がいい。抽象論かも知れないが頑張っていたいただきたい。

Patrick Mackey さんは大阪の the best of the best として千日前道具屋筋、宝山寺、

大阪歴史博物館、梅田スカイビル、海遊館、大阪城公園をあげている。いろいろな所があると書いている。ガイドブックに載る、こういうことは認識しながらやらないといけないと思うのでご紹介した。

2020年のオリンピックに合わせた文化イベントで関西、大阪の魅力を大きく展開できないか。大阪万博50周年、大阪はバイタル（活力があつて）、リバブル（住みよい）ということの世界にアピールするいい機会である。

ディスカッション

日本大学 岸井 隆幸 教授

関西学院大学 角野 幸博 教授

都市活力研究所 坂田 清三

坂田) 後半のディスカッションでは大きく3つの論点について議論をいただきたいと考える。1つは国家戦略特区が動き出しているが、経済、産業の活性化と都市空間、都市計画をどう考えるか。2つめは都市政策の新しい動向を踏まえながら大阪の都市構造、都市づくりをどう考えていくか。3つめは2020年とその先を考えて大阪は何をやっていくか。なお、いただいたご質問についても議論の中で出来るだけお答えいただくようにしたい。

国家戦略特区の関西の区域会議は先日全国に先駆けて開催された。これまでもいろいろな特区があったが今回は規制改革など大きく進むのか。いろいろ議論があるようだが、やはり東京が本命なのか。

岸井) 東京は都心9区のみ指定を考えている。政府からはより広くという話もある。やや「特区疲れ」という感がある。特区と言ってもプロジェクトが動かないと何も起きない。民間ベースで具体的に実際に動くことが詰まっているかどうか、そのプロジェクトの良し悪し次第である。

坂田) 大阪では容積率のボーナスをもらっても床が活用できない。仕掛けも含めて考えないといけない状況にある。

角野) 健康・医療をテーマにするとして産業、研究開発でどういう展開があるのか。展開しやすいビジネス環境、都市環境は何か詰められていない。計画として産業と都市空間が見えてこない。

ナレッジ・キャピタルは誰もどういうものか判らなかつた。具体化したらニーズが見えてきて光が見えてきたように思う。ビジネスのスタイルは以前のように均質なものではなく変わってきた。例えばカフェでパソコンを使って仕事をする。ビジネス・スタイルの変化と空間デザインの変化の両方を考えて拠点のあり方を考えていく。大丸有のエリアも商業があつてオフィスもあるという新しいスタイルになっている。

大阪は昼間人口が減っている。イギリスの都市再生はどれだけジョブが発生したかとい

う議論をする。雇用の目標設定も必要である。

坂田) 国家戦略特区の計画案に「イノベーションを支える都市環境」とあるがブレイクダウンしないといけない。東京ではどういう組み立てになっているか。

岸井) 公開空地などを整備すれば容積率のボーナスを与えていたが、都市再生では公共貢献、空間・機能で容積率のボーナスを与える。東京の場合はそれで動いているが、オールジャパンではそれでは動かない。

こういう機能が欲しいということならみんなでつくればいい。実は都市計画法では道路、公園、下水道だけではなくあらゆる施設が都市計画決定できる。計画決定して優遇措置を考える。横浜市では拠点病院を誘致したいということで都市計画決定をしている。それにもとづいて土地を無償貸与するなどの支援措置を行っている。

ナレッジ・キャピタルはインキュベートする機能。次は起業をどう支援するか。古いビルをリノベーションして低賃料で貸すというのも一つの方法である。

角野) 都市計画決定するというのは大事なポイントだと思う。まち、地域に必要なものを都市計画決定していくという考え方がもう少し広まっていくべきである。

岸井) 都市再生特措法の改正で機能誘導地区を決めることが出来るようになる。土地の集約への支援措置などが用意されている。手間はかかるが、地元、民間と話をしながらうまく活用していけばいい。

角野) 50年後、100年後をにらんで継続性はどうか、変更をどう考えるか。

岸井) 昔なら考えられなかったが都市計画道路の変更、廃止などいまは大胆にやっている。柔軟な計画論もあるはず、組み立つようならしっかりとつくる、状況が変わってきたら変更する。

坂田) 東京の大手デベロッパーも最近はインキュベーション、コワーキング・スペースなどをつくっている。健康・医療でどう考えるか。例えばスポーツ産業は関西発が多い。

岸井) いま東京で日本風、和風と言っているがオリジナルは関西。クールジャパンのオリジナルは関西ということをもっと言った方がいい。

角野) 和食は京都、大阪、まさにそうである。

岸井) ディープな世界を演出する、そこにしかないもの、聖地、小規模ネットワークの中から世界に売り出していく。神戸の異人館も一度に整備していない。ある人はこれを見た、次の人は別のものを探して見て自慢する、ディープなものを多様につくって何回も来てもらう。とんがったものを大事にする。

角野) ディープを言い換えると階層性。健康・医療も階層性を考えるとサイエンス、産業、文化・アート、スポーツ、食、ファッションなどがある。健康・医療を展開して深めて関西の特性につなげていく。例えば理美容の専門学校がミナミに多くある。ファッションとなると都市空間にもつながっていく。

坂田) 国際競争力、外国企業の数などでは東京と大阪の差は大きい。シンガポール、香港に対抗するのはやはり東京になってしまう。

岸井) マスで勝負するとなると欧米系と中国系の接点であるシンガポール、香港が強いことになる。東京が世界に通用するとしたら日本の魅力であり、その魅力の原点は関西ということをもっと言うべきである。日本全体に渡って奥の深さをどう展開できるかが求められている。

坂田) オリンピックの予算削減の動きはどうか、東京はバブルになっているのではという質問をいただいている。

岸井) 候補地選定の段階から実行段階になって予算削減の議論が出てくるのは不自然なことではない。東京開催の優位性には影響しない。いっぺんにやるとバブルのような問題になる。だから30年ずつ式年遷宮のように回していけばいいと思う。

坂田) 2つめの論点に移らせていただきたい。大阪の都市構造でキタへの集中が言われている。

岸井) 京都、神戸があって関西の都市構造は東京よりも多様である。大阪はその中心、もっとディープにあれもある、これもあると思わせることが大事。キタに来て大阪はすごいと思わせて、さらにミナミもある、だから20年、30年かけてでも御堂筋を魅力のある緑の空間にする。

角野) 東京は山手線の各駅に個性のある核が形成されている。大阪の環状線はもちろん山手線と大きさが異なるので単純に比較はできないが、大阪の環状線の中にいくつも核ができるとは思えない。キタとミナミの2極があってそれを御堂筋がつなぐというのが基本構造である。他にいくつ極ができるか、それが関西として可能か、冷静に考えないといけない。それぞれの核は同じようなものではなく、別のテイスト、個性があるべきである。キタ、グランフロントは大阪らしくないまちづくりというのもあり得る。

坂田) 財団では昨年、都市と大学をテーマに検討を行った。東京と違って大阪の都心には大学がほとんどない。

岸井) 学生の感性、チャレンジの気持ちは刺激になりエネルギーになる。外国人向けのガイドブックに渋谷は土曜日の午後2時に行って公園通りの歩道が人でいっぱいなのを体験するように書いてある。人が集まることが都市の魅力である。東京は都心に大学が戻ってきて次のものが生み出されるような気配が出てきた。大阪は住みやすい、暮らしやすいと言うが若い人もそう思うような仕掛けをつくっていただきたい。

坂田) ベイエリアの今後ということでIR、カジノについて質問をいただいている。

岸井) カジノについては賛成できない。シンガポール、マカオ、ベトナムなど次々とできていえるが、ヨーロッパと違って日本のパチンコ屋のような印象がある。ラスベガスの会社のパッケージ、果たしていつまで続くか。

角野) パチンコ屋はまちに溶け込んでいる。それを大規模に囲い込むと特別なゾーンになる。まちにとってどちらがいいのか。

坂田) 東京は鉄道の相互直通が縦横に行われている。関西の交通基盤はまだ弱いのか。

岸井) 東京は世界の都市が求める姿に近づいたが、相互直通で今度は遅れがでるようにな

った。定時性への信頼がゆらぎはじめており、どう遅れを少なくするかという議論になってきている。東京の鉄道は放射状だが郊外で高齢化が進むと人の動きは通勤ではなくなる。バスなどの地域の身近な交通ネットワークも今後の課題になる。

角野) 関西の各拠点、大阪の各拠点をより早く結ぶネットワークの強化は必要である。郊外はコンパクトシティ化で生活拠点に集約していく。近隣レベルの交通でそれを支えていく必要がある。

岸井) 働いている高齢者は要支援、要介護にならない。医療費の削減にもつながる。社会に参画する仕掛けが大事、身近な移動をサポートすることも必要である。

坂田) 高齢化、人口減少、集約型都市構造への転換についてもいくつかご質問をいただいている。

角野) 都市圏が縮退すると言っても均質に進むのではなくいくつかの核に集まっていく、集めていくということだと考える。買物、医療、子育て支援など核の機能は何か、そこに居住機能も集約されるのか、バス便の住宅地には若い人が住むのか。アンケート調査を行うと死ぬまで住み続けたいという回答が7、8割、強制的に動かすのは難しい。どうしようもなくなると高齢者施設に入って空き家になる。世代交代、相続が起きてやっとなら再編につながる。時間がかかる、じんわり再編していく話でないと受け入れられない。

坂田) 東京では人口流入が続くのでうまく回っていくのでは。

岸井) 郊外で人口が減っていくのは東京も同じ。人が減っていくから住む所を選べるようになっていく。整備しやすいのは団地、ニュータウン、再構成によって住みたいところにしていく。地方都市、大都市郊外では土地のやりとりをしながら再編を進めていく。誰かが土地をつながないといけない。従来は土地開発公社があったが、あらためて無利子のお金で土地をやりとりする仕掛けが求められると考える。

坂田) 国の新しい都市政策の動きを踏まえ大阪で取り組むべきことは。

岸井) エリアマネジメントについては大阪版B I D制度で先頭を走っている。さらに展開していただきたい。都市基盤の老朽化、アセットマネジメントについては、更新をうまく回していくなどどう考えてやっていくか、模範になるような取り組みを行って欲しい。木造密集地での道路整備は周辺エリアの更新も合わせて考えないといけない。道路、街路事業も、周辺地域の整備と合わせて考えるのが当たり前というように発想を転換すべきである。

坂田) 御堂筋を緑の大通りにするというご提案をいただいた。

岸井) フランクフルトは1960年頃から議論を始めて1970年頃から周辺の道路を整備し中心部を緑の通りにした。大阪も思い切ってやってみようか。また東京の秋葉原～御徒町の高架下を利用した2K540では、ものづくりでつくりながら売った小さな店が入って、アクセスはよくないが結構はやっている。小さくても魅力あるポイントをつくれればよりディープになっていく。

角野) 御堂筋は、高さが揃っている、銀杏並木があるということではなく、キタとミナミ

を結び近世以来の船場を控えているということから、都市のシンボルにならざるを得ないと思う。船場は職住近接のまちづくりを行うなど各エリアの個性を明確に打ち出していくことが必要である。

坂田) 3つめの2020年に向けた大阪の取り組みについては既にいろいろお話をいただいた。既に定刻を過ぎていおり、ここで大阪市の高橋理事に会場から一言お願いしたい。

高橋) 大阪の都市再生緊急整備地域はキタ、中之島、御堂筋、ミナミがつながった形で指定されている。それぞれの個性を活かしながら一体的に考え、とんがったものも埋め込みながらコンパクトな都心をつくっていききたいと思う。大阪だけでやっていると見えない面もある。御堂筋のあり方などまたアドバイスをいただければありがたい。

坂田) 村橋先生、いかがでしょうか。

村橋) 今日は具体的にいろいろな指摘をいただいた。1つは目標感が大事。うめきたのプロジェクト以降、関西、大阪の目標感があまり見えてこない。もう1つは継続性、継続性を持って取り組むことが大事だとあらためて思った。

坂田) 最後に両先生にご発言をお願いしたい。

角野) うめきた2期が出来るのは平成30年代になる。そんな先のことは民間では決められない。緑のあり方とかコアになるものを都市計画とかで明確に決めてあとは民間にやってもらうようにする。都心の各エリアについてもこれはつくる、これは許可しない、これは担保するというを決めてあとは民間に活動してもらう。これからはそういう官民の連携、協働が必要だと考える。

岸井) 2020年オリンピックは東京だが、あわせて行われる文化イベントは全国になる。2020年は万博50年と考えた方がいい。日本文化のルーツを見せるという戦略で文化イベントを関西がリードしていく。御堂筋100年は2037年、20年以上ありいくらでも変えられる。関西は京都、奈良があり、こういう大都市圏は世界にない。大阪のイメージを世界にアピールしていく戦略をぜひ考えていただきたい。

以上